

「おふでさき」第一号の第一首から第三首は、

よろつよのせかい一れつみはらせど  
むねのハかりたものハないから 一  
そのはづやといてきかした事ハない  
なにもしらんがむりでないそや 二  
このたびハ神がをもていあらはれて  
なにかいさいをといてきかする 三

まず語句の意味を確認すると、『広辞苑』によれば「よろずよ」とは日本書紀を出典として「限りなく長く続く世」という意味であり、漢字は「万世」あるいは「万代」が当てられる。また、「一れつ」とは1777年に初演された「伽羅先代萩」という歌舞伎の狂言を出典として「そろくこと・一緒」、あるいは1739年に発刊された石田梅岩著の『都鄙問答』という心学書を出典として「同一・同類・同じ仲間」とされる。「おふでさき」が1869年から1882年に成立していることを考えると、やや早い時期の狂言や心学書にも登場する「一れつ」という言葉は当時一般的に流通していたと考えられる。また、「なにか」とは「何彼」で「なんやかんや」であり、「いさい」とは「委細」で「細かく詳しいこと・万事」という意味である。

第一首を当時の言葉の意味から直訳すると、「限りなく長く続く世(代)の、世界の同じ類を、見晴らしたが、胸の分かっている者はないから」となる。まず「見晴らす」という動詞に着目すると、「世界の同じ類」という目的語に対して、ここでは主語が明確ではない。それは和歌の形式ゆえの省略と言えるが、いったい誰／何が「見晴らす」のであろうか。その際、「見晴らす」対象とされる「世界の同じ類」の中には、「胸の分った者」とそうでない者の区別が設けられ、「胸の分かった者」はいない(否)と判断される。

「見晴らす」とは視覚的な働き的一种であるが、五感のなかでも視覚では「見る／見られる」という区別を導く対象化の働きが強い。例えば、右手が左手に触れる場合、右手は触れる(能動)と同時に触れられ(受動)、そこでは触れる／触れられるという区別は容易に曖昧になり、触覚は対象化の働きが弱いといえる。それに対して、視覚は見る主体と見られる客体とのラインを明確に引き、主語と目的語を強く求める。したがって「見晴らす」という作用が現れた時点でその作用の主と客が相関的に要請され、第一首において「見晴らす」主体が明示されていないもののすでに潜在的に示されている。さらに言えば、そのような対象化の作用そのものが、「よろつよのせかい一れつ」や「むねのハかりたもの」の出現を成立させる背景・土壌を用意している潜在的な主体ともいえる。

第二首では、第一首の末尾より続いて「ない」という否定語が特徴的である。すなわち、第一首の胸の分かっている者は「ない」に続いて、聞かせたことは「ない」、知ら「ない」、無理(理が「ない」と述べられ、さらに無理では「ない」と二重否定によるある種の弁証法が展開されている。つまり、対象化の作用により登場した「よろつよのせかい一れつ」の中で、「むねのハかりたもの」がネガティブな仕方(否定語を使って)指示されているが、そのような事態は即座に「無理はない」(理が「ない」のでは「ない」と肯定される(理が「ある」)。

このような弁証法的な肯定がなされる理由は、「説いて聞かすこと」と「知ること」の相関性による。「説いて聞かす」側

の主体は第一首において暗示されている「見晴らす」主体であり、他方で、「知る」とは「胸の分かっている」と同義であるからその主体は「よろつよのせかい一れつ」である。しかし、「説いて聞かす」と「知る」という作用では、「見晴らす」という作用より対象化の度合いが低く、主と客の分離が曖昧なかたちで為される。つまり、日常用語的にも了解できるように、「説いて聞かす」とは「言葉で言って分からせる」ことであり、その作用のなかにすでに「知る」「分かる」が含まれている。そして、その成立には「説いて聞かされる」受身的な客体と同時にその作用のうちに含まれている「知る」作用における主体性を要請する。このような「説いて聞かすこと」と「知ること」の相関性により、一方が否定されれば他方も自ずと否定され、「無理はない」という二重否定が成立する。その際、対象化の作用そのものの潜在的な主体であったように、同じその主体(「説いて聞かす」主体)は、この二重否定を成立させる「自ずと」(=理)という部分と重なると言える。

そして、第三首において、これまで潜在的に示されていた「見晴らす」「聞かせる」主体が「神」として、しかも「現れて」と直接的な表現を用いて明示される。これまでの流れに即すと、第一首では「見晴らす」という対象化作用としての潜在的主体とその対象の否定(主客分離)、第二首では自己と対象の共否定による「理」としての潜在的主体の現れ(主客融合)、そして第三首で「神」としての潜在的主体の顕在化と対象の主体化(主客一致)が示されていると言えよう。そして第四首以降、この「神」について順々と明らかにされていく。

ところで、「せかい」とは多義的な言葉である。『広辞苑』には「地球上のすべての地域・国家」「自分が認識している人間社会の全体」「職業・専門分野また世代などの同類の集まり」等々と説明され、思想用語としては「存在者の全体」「可能的経験のいっさいの対象の総括」等々と言ひ換えられている。詳しくは追々考えるとして、まず私の経験に即した「世界」を記しておきたい。

アメリカに留学して一年が経った頃、自分がアメリカにすることが日常になった。それは旅行から家に帰るときに感じる安堵の気持ちをアメリカでも持てるようになったということで、出掛けた先が帰る場所になった。と同時に、これまで帰る場所だった日本という国を外から少し距離を置いて眺められるようになった(対象化)。きつと自分のなかで「世界」の感覚の基点がアメリカに落ち着いたのだろう。一旦このような感覚になると、国という単位で物事を考えることにも違和感がなくなった。その土地に行ったことはなくとも、例えばフランスという国、インドという国、あるいはイスラエルという国など物事を国単位で考える習慣が身につく、地理的には遠くとも頭の中では圏内になった。国内でも例えば奈良と大阪を電車で行き来するうちに「関西」という感覚が身につく、行ったことはなくとも京都が圏内になることに似ている。しかし、国単位で考える物差しを持つと自分のなかの「世界」が格段に広がる。これまでの日本一国から理念上は何百カ国に増え、政治、経済、文化、宗教などに関して関西における奈良と大阪の違いより国際関係における国と国の違いの方が大きいからだ。このような地理的・生活範囲的な広がりとしての「世界」に即して第一首を読むと、「よろつよのせかい一れつ」を「見晴らす」神の視点の広大さが少し伺える。